

宇留津城没落之事

小早川隆景、吉川元長、吉川経言二萬五千予騎を卒いて、豊前国京都郡神田松山の城に陣を移しける。殿下よりの検使黒田助解解由も、其勢三百騎にて陣を移されける。仲津郡馬岳の城主長野三郎左衛門も降人となり、黒田の手に従いしかば、孝高おのが勢に引きくわえて屯をなす。ここに、築上郡宇留津の城に賀來与次郎、同新右衛門、同孫兵衛等立て籠もりけるに、元長、隆景より使を以て降参するに於ては、一命を助け本領を申し与えべしといい送るは、城中より、さん候仰を待たず是より望てこそ降参を逐申すべき事に候。然共父入道専順、香春嶽の城主高橋元種が許へ人質としても居候。我ら身命を惜み所領を望て御味方に候はば専順は高橋が為に頭を刎られ候はん事、孝子の道にあらず。故に命を捨、妻子をもかへりみず一戦を申すべしと存定て候と返答しければ、さらばとて、天正十四年十一月七日の鷄鳴に、小早川、吉川、黒田、長野、宗像都合其勢二萬八千余騎、神田松山を打立て、辰の刻に宇留津表に着陣す。此城東は海水、南北は深田なりけるに、南方の寄手は黒田、長野。北は小早川。西は吉田勢陣を分て押寄たり。其比、吉川元春小倉の城にて疾病なりければ、元長、経吉は父の看病に小倉に至りて、

字留津の攻口には、元長の名代として、家臣、宮莊太郎左衛門春実
に、古志囚幡守重信を後見に相副、其外、今田中務少輔経忠、香川
兵部大輔春実、粟屋彦右衛門就光等を先として、宗徒の兵ども差向
らる。諸軍勢仕寄をせんとする所に、黒田家の士、城近くかけ寄せ、
指物を抜て城中へ抛りこみたるを、城兵是を取て勇み匍りければ、
余所目には、黒田の手のもの城中に乗り入りたる様に見へける故、
やれ勘解由が手より城中へ切入たるはと云ふ程こそあれ。取あへず
我もわれもと掛からんとす。是を見て、黒田勢人に先を越られしと
曳々声を揚て攻上る。吉川勢は黒田より先に乗り人らんと一番に堀
の手へ攻寄、既に乗破らんと走り懸りける所に、城中より鉄砲隙間
なく打出しければ、まつ先に進んだる牛尾大蔵左衛門、唐冠の兜真
向を打破られ、矢場に伏て死にけり。されども続く兵少し
もひるます一度に城へ乗り人ければ、惣軍士我劣らじと攻入て、頓
て火をかけたりに、作り並べたる藁屋共、一度に焼上りける間、
城の兵も寄手の者も、共に煙にまかれて何れを敵、何れを味方とも
辨へがたく、入乱れてぞ戦いける。

ここに大手の門の右の方、火矢の用心に藁家の上を、赤土にて塗た
る家の中より、貢米源助景勝と名乗りて込入る倣を切出し、績く味

方もなければ、又内へ引籠り、二三度かく振舞ける所に、吉川勢の中に、境孫次郎と云大力の剛の者、是を見て太刀抜きて切て入る。源助三尺あまりの大太刀を以て曳やっとなりて打ちかかりけるに、境が眉の上したたかに切れて、流るる血、眼に入ける間、力なく引て出にけり。香川兵部大輔春継能き徹もがなと馳来るを見て、源助以てひらりて丁と切れば、香川しとと受流しけるを、続様に三刀迄こそ切たりけれ。兵部つと入りてむずと組けるに、賀来は聞ゆる大力なれ共、初太刀を打て引怪しみ遁すまじ、但し降人に出は助くべきぞと云ければ、若き男後を顧みればぶ年蘭たる者唯降参し給へと云を聞て、一命御助候けで降人に出べく候と腰を折て云けるを、井下心易く思はれよ、命は助べく候と答ふ。かしこまって候とて間近く寄る所を一打に切伏頭を取たりけり。され共まだ壮年にもたらぬ者の首なれば、実検に人てもよしなしと思ふ所に、降らんと出ける者ども、此頭を見て、礼を厚ふして通りける間、様子有と思ひ是を問へば、さん候当城の大將賀来与次郎殿の首にて候とぞ云ける。

又、香川が討たる首を見て、是も当城の大將にて候。宗領は与次郎殿にて候へども、若年に候故、叔父源助、近年は大將のごとくにて、

国政悉く此人の胸襟を経すと云事なし。十日以前新右衛門と改られて候とて、泪をはらはらとながしける。新右衛門最期に至て源助と名乗りし事、日頃、人の知たる名とや思ひけん。時に兵部にひざの口をしたたかに切られける間、働く事心に任せず。終に組伏られて香川がために討れにけり。谷田越中守は其勢三十騎ばかりにて、敵の出べき道に待伏して、出来る敵を討にけり。柳沢新左衛門は輝元より黒田の許に使者に米りけるが、能き折なればとて馳向ひ、能敵一人討取りけり。宍戸備前守元秀も、敵を一人討取りぬ。同手の士に末兼土佐守、粟屋次郎右衛門、福万市之介、寺下市之介浅原備後守、渡邊壱岐守等、分捕り高名あまたなり中所掃部、勢一四郎兵衛、猶井、菅田等討ち死にせり。吉川勢に井下左馬允といふ者よき敵もがなと望め共、更に逢うものなかりければ、城の後に池の有けるを、行き廻りて見る所に、年の程十八九計の男と、又四十計の男”、彼の兩人城の焼ける間は池中に人て居りけるが、さのみ水中にも堪得ず。何方にも落行んとや思ひけん、汀へ颯と上らんとする所を、井上口に熟しける奮名にてや有けん。去程に、其日寄手に討取首一千余級、焼死たる者は数を知らざりけり。黒田より賀来兩人の首をは桶に人、大坂へ贈られけり。また、生捕たる男女四百余人をば、

悉く磔にかけられけり。城辺の死骸ども皆海へ流し捨て、掃除させて軍兵を入置。諸軍勢は御田へ帰りけり。

両豊記 卷18 天正14年（1586年）